



独立行政法人 国立病院機構

四国こどもとおとなの
医療センター

アートプロジェクト



—今月のショット—

花瓶の模様替え

2016年 10月号

—院内の小さな声から—

電話口から聞こえてくるのはとても小さな声でした。ボランティアを希望されるとのこと。面接の日取りをお伝えして、お話を聞くことにしました。当日、彼女は時間通りにやってきました。少し、体調が悪そうに見えました。「自分にできるかどうか分からないけれど、どんなボランティアがありますか？」とおっしゃるので、ニッチの中に入れるプレゼントづくり、メッセージ書き、足湯、バイオリン演奏、絵本の読み聞かせ、「それからこれは。。。」亡くなった赤ちゃんのためのベビードレスを見せてご説明した時のことです。「このドレスを・・・このドレスをいただいたのです・・・それで、私にも何かできることがあれば・・・」と、彼女は目に涙をいっぱい溜めておっしゃったのです。痛みを抱えているからこそできることがこの部屋にはたくさんあります。



今月の一枚

作家名：イワサトミキ
作品名：はたのいえ

—病院の外にいる仲間—

京都のモーネ工房さんは「病院の外にいる仲間」です。開院時にいくつかのプロジェクトで関わってもらってからずっと、ニッチの中に入れるプレゼントを送ってくださったり、ニッチに飾るアート作品に手を加えてくださったり(今回は白いお花の入っている花瓶をカラフルなものに模様替えしてくれました)遠くにいてもずっと近くで当院の成長を見守り支えてくださるボランティアメンバーです。モーネ工房さんには感性の響き合う、多くの仲間がいて、その仲間がまた当院の取り組みを知って患者さんのためにたくさんの贈り物を届けてくださるのです。(例えば写真左のユニークな動物が登場するポストカードなど)開院以来、いったいいくつプレゼントをいただいたことでしょうか。本当にありがたいことです。先日、外来の看護師さんが「ちょっと、ちょっといい？すごくいいことあったよ。」と呼び止めてくれました。なに？と耳を傾けると「あのね、すごく入院をいやがってる女の子がいたのよ。泣いて泣いて、玄関からずっと、4階にあがってもずっと泣き止まなくて、それで皆困り果てて、そしたら、ふと廊下のニッチが目に入って、「この扉、開けてみて」って。私、どうかプレゼントが入っていますように。。。って祈るような気持ちで言ったのよ。そしたら入った！女の子はびたっと泣くのをやめてプレゼント握りしめて病棟に入って行った。嬉しくて、もう、絶対伝えたいと思って。ニッチがこんなに役に立ってるってこと。」看護師さんはまるで自分が泣いていた女の子だったかのように、満面の笑みで話してくださるのです。そんな時、私はいつもプレゼントを作っているボランティアさんに心から感謝の気持ちでいっぱいになります。そして同時に看護師さんの飾らない言葉と優しさに深く胸を打たれます。

「祈る・待つ・寄り添う」というコンセプトのもと、私の絵が患者さまやそのご家族のみなさんの目に留まった時、その人の心にちょっとしたそよ風が吹いたような、そんな気持ちになっていただける絵になれたらという気持ちで描かせていただきました。